

カルカッタの建設と都市形成

——十八世紀末までの都市誌の試み——

応 地 利 明

【要約】 イギリス東インド会社が、スタニユティに商館を設置したのは、一六九〇年のことであった。以後、カルカッタは、イギリスのベンガル支配ひいてはインド支配の拠点都市として成長していく。本稿では、十八世紀末までのカルカッタの都市形成を、つぎの三点からあとづけた。

第一は、十七世紀後半におけるバーギラティ——フーグリ水系への、政治的・経済的成極化の進行と、イギリスのベンガル進出の過程である。そのなかで、チャーノックによるスタニユティ選定の経緯について検討した。

第二は、十八世紀前半におけるカルカッタの成長過程である。とくに、カルカッタの後背地の形成と初期の都市プランについて検討した。

第三は、十八世紀後半におけるカルカッタの変容過程である。シラージ・ウダウラーからのカルカッタの奪回と、ブラッシーの戦いでの勝利は、カルカッタの性格を大きく変えた。それを契機に、カルカッタは、ベンガルにおける商館都市から、インド支配の政治的・軍事的拠点へと変貌する。その変貌は、再建カルカッタの都市プランにも明瞭に刻印されている。この時期に、現在にもつづくカルカッタの基本的な都市構造はできあがり、またイギリス人地区とインド人地区との空間的セグリゲーションも明確化していく。

史林六〇巻六号 一九七七年十一月

はじめに

イギリスのインド支配は、伝統的なインド都市にさまざまな改変をくわえただけでなく、支配の拠点として自らの都市

をつくりあげていった。たとえば、一九七一年現在、インドの百万都市は八市をかぞえるが、そのうちカルカッタ・ボンベイ・マドラス・カンプールの四市は、ともにイギリスによって建設され、短期間のうちに寒村から巨大都市へと成長した、という共通した歴史をもつ。なかでもカルカッタは、その典型である。十七世紀末に、イギリス東インド会社の商館所在地として出発し、同会社のより古い拠点であるボンベイ・マドラスなどをおい越して、一七七四年から一九一二年までのおよそ一世紀半にわたって、イギリスのインド統治における首都として君臨していくのである。

カルカッタについて、ボンベイ生まれのイギリス人作家キップリング (Kipling) は、かつてつぎのようになつたことがある。

「チャーノックの午餐の休息から 都市が成長した。ちようど かびが温床から無秩序にはびこっていくように 都市がひろがっていった。偶然に導かれ 偶然に設立され 定められ そして建設された 泥土の上に。宮殿と牛小屋と掘建小屋が 貧困と誇りが たがいにとりあつて」。

ある意味では、この詩は、カルカッタの成立と拡大のプロセスをいみじくもうたいあげている。たとえば、カルカッタが、成立契機をチャーノックに負っていること、また無秩序な都市拡大が展開するままに成長を上げてきたこと、などである。かねて、私は、インド農村の変容過程が、都市との関連で説明されなければならないことを痛感してきた。そこから、インドにおける農村と都市との関係を、つぎの二つのアプローチのもとに研究したいと考えている。第一は、地方的小中心都市の存立基盤の検討であり、第二は、巨大都市における都市化の展開過程の研究である。本稿は、第二のアプローチから進めている、カルカッタ研究の一環をなすものである。^① その目的は、十七世紀末～十八世紀末のおよそ一世紀間における、カルカッタの建設と都市形成のプロセスを検討することにある。

インドの地理学研究においても、都市の成長過程の研究は、主要なテーマの一つである。しかしそれらの研究は、南インドとガンジス川中、上流域の両地方に偏倚している。^② ベンガルを対象とする研究は意外に少ない^③ えに、カルカッタに

ついてはほとんど皆無にひとしいのが、現状である。しかも、本稿でとりあげる十七〜十八世紀のカルカッタに関しては、もともと資料が少ないだけでなく、わが国で管見しうるものはごく限られている。そのため、多くを二次的資料に依存せざるを得なかったことを、おことわりしておきたい。

① カルカッタについては、すでにつぎの二つの小論でふれたことがある。

拙稿「カルカッタ」(藤岡謙二郎・谷岡武雄編『世界の百万都市』昭和五十一年、所収二二一〜二二三ページ)。

拙稿「カルカッタの形成と発展——十九世紀における都市整備を中心として」(藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『都市研究』昭和五十三年刊行号)。

② Indian Council of Social Science Research: A Survey of Research in Geography, Bombay, pp. 204〜205.

③ マンガールを対象とするものについて、つぎのような研究をあげうるべきであろう。

Bhattacharya, N. D.: Murshidabad—a study in urban geography, *Nat. Geogr. Jour. India*, Vol. 5, 1959, pp. 38〜51.

Dutt, A. K.: Evolution of Janshedpur City, *Indian Geogr. Jour.*, Vol. 41, 1966, pp. 19〜26.

④ India Census Commissioner: Census of India, 1951, Vol. 6, Part 4, p. 5.

一 カルカッタ建設の背景

カルカッタは、ガンジス デルタの西端を流れるフーグリ (Hooghly) 川に面している。周辺は、地形発達史のうえで、成熟期から老衰期に分類される三角州がひろがっている。このうち、老衰期三角州の特徴について、井関弘太郎は、バグチ (Bagchi) によりつつ、おおよそつぎのように要約している。^①「老衰期三角州の地区では、河道の多くは埋積によって寸断された池沼状をなし、また発達した自然堤防のため、河川は増水期においてすら氾濫しない。したがってよどんだ河水と、砂質壤土からなる自然堤防と、マリリアの発生源となる腐敗した後背湿地——しかもその一部は塩水化している——とかなり、三角州地域では最も非衛生的な地区とされている」。

カルカッタは、ここで述べられているような老衰期三角州の自然堤防上に成立した都市であり、東には塩水性後背湿地

がよこたわっていた。そこは、マラリアやコレラをはじめとする各種熱帯性疾病の汚染地であり、とりわけ非健康的な地域であった。さらに、カルカッタは、ベンガル湾頭から約一〇〇キロメートルさかのぼった内陸に位置しているにもかかわらず、そこでのフーグリ川の潮差は、三〜六メートルに達するという悪条件をになっていた。それは、冠水の被害をこむりやすくするとともに、同川の河川港であるカルカッタ港への外洋船舶の航行を危険なものにした。これらの諸々の悪条件をおし切って、この地にロンドンにつぐ大英帝国第二の都市が成立するにいたったのは、まさしくイギリスのベンガル支配への意志によってであった。

したがって、カルカッタの建設を考えるにあたっては、つぎの三点を当面の検討課題としてとり出さう。すなわち、

- (1) ヨーロッパ人の来航を契機とするベンガルの地域構造の変化。

- (2) それにともなうフーグリ川流域への成極化の進行。

- (3) それらに並行して展開していったイギリス東インド会社のベンガル進出。

これら三点の検討を通じて、カルカッタ建設の背景をあきらかにすることが必要である。

(1) 十七〜十八世紀におけるベンガルの状況

周知のように、十七世紀にはいると、ヨーロッパではいわゆる「インド熱 (Indian Craze)」がたかまわっていく。それにつれて、インド産品への需要が拡大する一方、それまでの主要商品たる香辛料の需要は減少していった。この過程のなかで、インドはヨーロッパと深く接触し、とくに繊維工業品の重要な生産地・輸出地となった。

ムガル帝国の歴史においても、十七世紀は、工業生産がもっとも拡大した時期であった。当時の工業生産は、大別して、二つの職人層によって担われていた。一つは、ガドギル (Gadgil) のいう村落工業の担い手であり、ローカルな需要に対応する伝統的な村職人層であった。他は、都市工業の担い手であり、宮廷貴族・富裕階級の需要に対応する都市職人層であった。さらに後者は、(a)王室の監督下にある王立工場 (カール・ハーナ Kar Khana) で働くもの、および (b)商業資本

第1表 17世紀、ムガル帝国領内における主要工業都市

（ブラカーシュによる）

工業名	主要中心都市
繊維工業全般	アグラ、デリー、ラホール、ムルタン、タッタ、アーメダバード、バローチ、スーラト、カンベイ、ブルハンプール、パトナ、ダッカ
綿工業	サルヒンド、サマナー、ナサルプール、セーワン、シロンジ、ナサリ、シャーザドプール、ソナルガオン、アングレザバード
絹工業	ベナーレス、ムルシダバード、カシムバザール、スリナガル、シアルコット、マルダ
羊毛工業	アルワル、バーラトプール、ファテプールシクリ、ジャムプール
金属工業	ベナーレス、アグラ、デリー、ラホール、タッタ、ブルハンプール、スーラト、パトナ、グワリオル、シアルコット、ウジン、バタン、アングレザバード、パーカル
製紙工業	アーメダバード、シアルコット、ガヤ、シャーザドプール
皮革工業	ラホール、タッタ、サルヒンド
ジュート工業	ダッカ

にくみこまれた職人層、の二つからなっていた。インド産品の市場が世界にひろがっていくにつれて、商人階級による工業生産の掌握がすすみ、(b)の職人層の拡充・肥大がみられた。都市職人層の広汎な成立は、都市の発展と拡大をもたらしとともに、都市機能の多様化を促進した。従来、政治都市・軍事都市という消費的性格をつよくもっていた都市さえもが、この時期には、工業・商業活動という経済的機能を集積していった。たとえば、アグラ(Agra)・デリー(Delhi)・ラホール(Lahore)・ムルタン(Multan)・タッタ(Thatta)・アーメダバード(Ahmadabad)などが、この好例であった。ブラカーシュ(Prakash)によって整理すれば、第一表に示したように、諸工業の集積都市が、この時期に帝国領内の各地に簇生していった。^③

第一表に列挙した諸都市のうち、ダッカ(Dacca)・パトナ(Patna)・ソナルガオン(Sonargaon)・ムルシダバード(Murshidabad)・マルダ(Malda)・カシムバザール(Kasimbazar)・ガヤ(Gaya)は、いずれも広義のベンガルに位置していた。これらの諸都市での主要工業は、いうまでもなく綿・絹などの繊維工業であった。ベンガル産の綿や絹の精巧な高級品は、ヨーロッパ人にとっては、妖精か昆虫がつくったもので、とうてい人間の手になるものとは思

われないほどであった、といわれている。^④ここで、ベンガルにおける諸商品の生産地についてやや詳しく述べれば、以下のとおりである。

まず、綿製品の主要生産地帯は、メグナ (Meghna) 川の兩岸を、およそ全長六十五キロメートル、幅五キロメートルにわたって展開していた。^⑤その中心は、ダッカおよびその周辺のカプシア (Kapsia) 地方——ダッカの北方にあたり、その地名はカパス (Kapas、綿の意) に由来する——であった。この地方の土壌は、ことに綿の良質種の生産に適しており、その品種は全インドで匹敵するものがないといわれた。^⑥同時にカプシア地方は、最高級のモスリン産地として著名であった。なかでも、現在は廢村と化しているソナルガオン——ダッカ北方およそ二十四キロメートルに所在——は、「インドで最良かつ最も繊細な綿布の産地」とされた。またダッカ産の手紡ぎ綿糸は、漂白するとより強く、より繊細になることで知られていた。そのほか、ラージマハール (Rajmahal)、ハリハルプール (Hariharpur)、バルバカバード (Barbakabad)、タンダ (Tanda)、バコール (Bacole) など、重要な綿業地であった。^⑦

絹製品は、良質の生糸産地であるパトナ周辺、およびフーグリ川沿岸のムルシダバード・カシムバザールで生産された。生糸の品質は、新鮮な桑葉を供給しうるか否かによって規定された。そのため、桑の栽培に適していたこれらの地方に、高級絹製品の特産地が形成されていたのである。^⑧

以上の綿・絹工業の発展は、漂白・金銀糸生産・刺繍などの関連工業の発達をもたらした。とくにダッカの金銀の細線細工や刺繍は著名であった。繊維関係以外では、ムルシダバードの象牙細工・真鍮製品、クリシュナガル (Krishnagar) の陶器、ダッカの貝細工——その原料は、遠くインド洋上のモルディブ (Maldivé) 諸島やスリランカから、バラソール (Balasore) 経由でもたらされた——、ジュソール (Jessore)・ファリドプール (Faridpur) の砂糖、北部地方のジュートなどの特産物があった。これらにくわえて、ベンガルには、ガンジス川流域で生産される諸産品、とくに硝石・インディゴ・アヘンなどの集散機能があった。^⑨

こうしたベンガルの諸物産をめざして、ヨーロッパ列強が進出してくる。その嚆矢をなしたのは、インドの他の地方おなじく、ここでもポルトガル人であった。彼らは、早くも一五三〇年代にベンガルに來航し、フーグリに商館を設立した。以後、十七世紀中期まで、ポルトガルはベンガルの国外貿易を独占する。しかし、彼らの熱烈な宗教意識と改宗強制は、しだいにムガル王権に対する挑戦とみなされるにいたった。そのうえ、ポルトガル人のインド人に対する態度が冷酷にすぎることあいまって、ムガル帝国側からみれば、彼らはむしろ歓迎されざる客であった。そこから、ポルトガルに對抗させる目的もあって、オランダ・フランス・イギリス・デンマークなどの後発グループが、ムガル王朝から好意をもって迎えられた。これらの結果、一六七〇年代には、ポルトガルはベンガル交易から脱落していく。クラベル (Clavel) は、一六七六年に、フーグリにポルトガル人について、つぎのように述べている。^⑩

「フーグリにはポルトガル人は多いけれども、彼らはいやしく、みすばらしい状態で暮している。ポルトガル人の交易は、もはや言及するに値しない。彼らは、いまだはムガールの傭兵となって糊口をしのいでいる」。

オランダ人は、ポルトガルに遅れること約一世紀の一六三三年に、はじめてベンガルに來航し、チンサラ (Chinsura) を拠点に、フーグリ・カシムバザール・パトナに商館を設けていった。^⑪ 一六五五年以後は、フーグリが、彼らのベンガルにおける最大の商館所在地となった。^⑫ しかしオランダ人も、十七世紀末には没落しはじめ、十八世紀にはいると彼らのベンガルからの後退は確定的となった。^⑬ 以後、彼らは、ヨーロッパ——インド間交易よりも、ヨーロッパ——東アジア間交易に主力を傾注していくのである。^⑭

フランス人は、やや遅れて一六八一年から八七年にかけて、西海岸のスーラト (Surat) からベンガルへ予備調査隊を派遣した。^⑮ その成果をふまえて、一六九〇年にシャンデルナゴル (Chandernagore) に商館を設立した。以後、カシムバザール・ダッカ・パトナへと商館網をひろげていった。十八世紀前半には、彼らのベンガルでの活動は最盛期をむかえた。しかしイギリスを凌駕することはできず、一七五七年のプラッシー (Plassey) の戦いで敗北によって、彼らの後退は決定

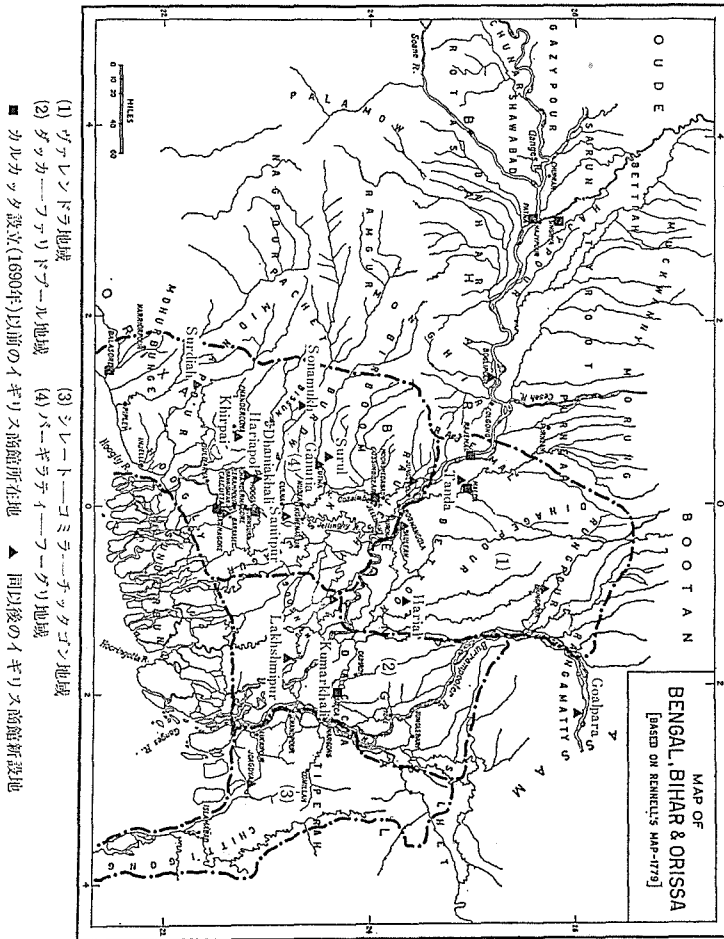
的となった。

デンマーク人は、一六七三年にバラソールに來航し、十八世紀はじめにセランプール (Serampore) に根拠地を確保した。しかし彼らのベンガルでの交易は、当初から大したものではなかったうえに、次第に後退していった。

さらに一七二〇年代には、フランドル商人とオーストリアとの合弁になる東方会社の活動がみられた。同会社は、一七二三年にムガル皇帝より取引許可の勅許を得、バンキバザール (Bankibazar)、ついでカシムバザールに商館を建設した。しかし、イギリスによる排斥運動が発生し、一七三〇年代には、同会社はベンガルから撤退せざるを得なかった。

(2) ベンガルにおけるイギリス商館網の形成

イギリスは、一六三〇年代から、ベンガル交易への進出をめざして努力を傾けてきた。まず、一六三三年三月二二日に、コロマンデル海岸のマスラパタム (Masulapatam) の商館から、ベンガルへ通商使節が派遣された。その目的は、ベンガル大守と会見してベンガルでの商館設立の許可を得ることであった。一行は、四月二一日に、現在のオリッサ州のハリハルプール (Hariharpur) に達し、さらにカタック (Cuttack) 近くのマルカンディ (Malcandy) において大守との会見に成功する。大守より、ワディア (Wadia、現在のオリッサにあたる) 内のいずれの地においても、関税なしで自由に交易しうる許可を得、同年、最初の商館をハリハルプールに建設する。さらに一行は、船を進めてバラソールに到達する。一六三四年には、そこにも商館を設置し、以後一〇年近くの間、バラソールはベンガル交易におけるイギリスの根拠地となっていく。一六五一年には、時のベンガル大守スルタン シュジャール (Sultan Shuja) から、年三、〇〇〇ルピーの支払いを条件として、いかなる制限もなしにベンガル内で交易しうる、という特許状 (ニシヤン、Nishan) を獲得した。同年、イギリス東インド会社は、フーグリに商館を設立する。それ以後、イギリス商館が、ベンガル各地に設立されていく。一六五七年には絹製品を求めてカシムバザールに、また硝石を求めてパトナとシンギヤ (Singiya) に、さらに一六六八年には、綿工業の中心であり、当時のベンガルの首都であったダッカ、および北西方の旧都ラージマハールに、また一六七六年には、



第1図 ベンガル内の四地域とイギリス商館所在地

生糸を求めてマルダに、おのおの東インド会社の商館が設けられていった。そして、一六九〇年に、本稿で対象とするスタニユティ (Sutanuty)、現在のカルカッタ市の北部地区にあたる) に商館が開設された。こうして、イギリス東インド会社は、十七世紀末には商館網をベンガル全土に広げること成功した。さらに十八世紀にはいると、第一図に示すように、そのベンガルにおける商館配置はますます拡充され、密度を高めていくのである。

ここで注目されるのは、カルカッタの前身であるスタニユティに商館を設置したのは、イギリスだけであつたけれども、そこが東インド会社のベンガルにおける根拠地として、当初から予定されたものではなかつたこと、また同会社のベン

ガルにおける他の商館所在地にくらべて、その重要性がとりわけ大きいわけでもなかったこと、の二点である。^④ これらの点について、パウリー (Bowley) の報告をもとに検討する。^⑤

彼は、スタニユティ商館設立の直前にあたる一六六九〜七九年来航し、フーグリ川周辺地域の測図と現況報告とおこなった。その報告には、スタニユティについては何の言及もみられない。また彼の作成した地図——フーグリ川下流部のうち、河口からフーグリまでを記載——によっても、現在のカルカタの地には、スタニユティとゴビンダプール (Govindapur) の二つの小集落が示されているのみであり、当時の寒村の状況を物語っている。それに対して、フーグリは、河岸ぞいに人家のたちならぶ都市的集落として描かれている。そして、フーグリについて、彼はつぎのように記している。^⑥

「フーグリの町は、同名の川の河口の浅瀬から一五〇マイルさかのぼったところにある。そこは、すばらしくすてきなところで、人口は多く、沢山のうつくしい建物で飾られている。美観を高めているのは、庭園、すばらしい木立、非常に大きなバザール、この国有数のきれいな旅人用の無料宿泊施設、および美しい二つのヨーロッパ商館——すなわちイギリスとオランダ——である。しかしここでは、オランダ商館の方が、われわれのものよりも立派であること
を告白しないわけにはいかない。……」

。町は、決して規則的にはできていない。しかし、非常に気持のいいところであり、ベンガルで最も富裕な商人も、いく人かはここに住んでいる。オリッサ・ベンガル・パトナから産出されるあらゆる種類の商品が、連日、公共バザール——一般に大バザールとよばれている——で取引される。大バザールという名がつけられているのは、綿花・粗キャラコ・食料品など特定の商品だけを扱うバザールが、そこに沢山あつまっているからである。ここフーグリのイギリス商館は、(ベンガル・オリッサ・パトナの) 三王領を統括する。……」

パウリーの記述は、フーグリの繁栄のさまを伝えており、フーグリ川ぞいでは、最初のイギリス商館がここに開設され

たのは至当であつた。^② 彼が述べるとおり、フーグリ商館は、当時のベンガルにおけるイギリスの最大の根拠地であつた。

(3) ベンガルの地域構造の変化

前述のとおり、ヨーロッパ列強のベンガルにおける中心的な商館は、フーグリ川沿岸に集中して設立された。第一図にみるように、フーグリ・チンサラ・カシムバザール・シャンデルナゴル・セランポール・ムルシダバード・バンキバザール・スタニユティなどは、いずれもガンジス川本流から派出するフーグリ——バーギラティ(Bhagirathi)水系に位置していた。ヨーロッパ人が、当時の綿業の中心であつたダッカ周辺ではなく、同水系に集中して進出してきたのは、その地理的位置と関係していよう。すなわち、フーグリ——バーギラティ水系は、ベンガルの西端部を流れるため、コロマンデル海岸ぞいに北上してきた彼らにとって、もっとも近い位置にあつたこと、かつ同水系を経由して内陸のガンジス川流域地方に進出することが、容易であつたこと、の二点である。他方、同水系へのヨーロッパ諸勢力の進出と、そこでのあいつぐ商館の設立は、ベンガルの歴史的な地域構造に変化をせまるものであつた。

モリソン(Morrison)によれば、十三〜十六世紀におけるベンガルの政治的・経済的中心の興亡は、ベンガル内部におけるつぎの四地域の存立と対応しているといふ。^②

- (1) ヴァレンドラ (Varendra) 地域。
- (2) ダッカ——ファリドプール (Faridpur) 地域。
- (3) シルハート (Syhlet)——コミラ (Comilla)——チャッタゴン (Chittagong) 地域。
- (4) バーギラティ——フーグリ地域。

これらの四地域の領域は、ほぼ第一図に示される。彼によれば、このうちの(3)を除く残りの三地域は、ムガル朝時代のベンガル史の分析においても、有用なフレームを提供するという。この点を、ムガル朝期のベンガルにおける政治的中心の変遷^②を通じて、検討することにしよう。

ムガル帝国のベンガルにおける最初の根拠地は、北西部にあたる(1)のタンダ(Tanda)におかれた。タンダは、ガンジス川中、上流域地方から、ベンガルへと至る門戸を扼する位置を占めていた。そこがベンガルの首都として選定されたのは、ベンガルに進出して日なおあさいムガル王朝が、その根拠地たるデリー・アーングラ地域との軍事的連絡を重視したからである。しかし次第にガンジス川の流路が変化したため、タンダは沼沢地にかこまれ、マリアアの蔓延地と化してしまった。その結果、一五九五年には、タンダを放棄して、ベンガルの首都はそこからガンジス川を少しさかのぼったラージマハールに遷都された。ラージマハールは、タンダとおなじく(1)のヴァレンドラ地域に属している。そこは、水陸兩交通を支配する要衝であるうえに、防衛も容易であるという好位置を占めていた。しかしラージマハールもまた、ガンジス川の流路変化のため、川岸からはなれて内陸にとりのこされることになった。そのため、内陸水路がもっとも重要な交通手段であった当時には、ラージマハールは戦略上の重要性を失ってしまった。タンダとラージマハールの場合に典型的に示されるように、〈河川流路の変化↓交通位置の変化とマリアアの汚染地化↓都市の立地移動〉という図式は、ベンガルにおける都市の興亡を説明するに際して、一般に用いられる図式である。それは、環境変化と同時に、ベンガル都市のもつ商業的性格をも物語っている。

ついで、一六〇八年には、(2)の地域に属するダッカに遷都された。それは、一つには、ムガル帝国のベンガル進出に抵抗したヒンドウ教徒のザミンダル勢力が、北東の辺境部に追いやられ、同地域が征圧されたためであった。また一つには、この時期に、ダッカを中心に綿業の拡大と経済的繁栄があったためであった。以後およそ一〇〇年間にわたって、ダッカはベンガルの首都としての地位を保ちつづける。

以上のように、十六〜十七世紀を通じて、ベンガルの政治的・軍事的枢軸は、ガンジス川本流ぞいに展開し、同枢軸上にある(1)および(2)が、もっとも重要な地域であった。しかし十七世紀後半には、あらたな変化が生まれてきた。それは、先述のヨーロッパ人のベンガル進出にともなう、(4)地域の重要性の増大であった。その結果、ベンガルの首都は、一七〇

四年には、上記の枢軸をはなれて、一挙に(4)に属するムルシダバードに遷都される。当時ムルシダバードは、フーグリー——バーギラティ水系の上流部に位置する地方都市にすぎなかった。たとえば、一六六〇年代にベンガルを旅行したタヴェルニエ(Tavernier)は、「ムクスサバード (Mukhsabad、ムルシダバードの別称) は大きな町であり、カシムバザールから三コス (Coss、一コスは約一・六キロメートル) のところにある」と述べるのみであり、その叙述は、ダッカやラージマハールにくらべてはるかに簡略である。しかし、十七世紀後半を通じて、ムルシダバードは重要性を高めていく。

ムルシダバードが新しい首都として注目されるにいたったのは、もちろん直接的には、フーグリー——バーギラティ水系へのヨーロッパ人の進出と、そこでの交易の活発化であり、ベンガル大守としてもそれを監視する必要があったためである。④ しかも同水系の上流部に位置するムルシダバードには、外洋船舶の遡航限界外に位置しているため、防衛も容易であるという利点があった。

こうして、十七世紀後半から、(1)——(2)というベンガルの伝統的な枢軸を変化させつつ、かわって(4)のフーグリー——バーギラティ水系が、政治的・経済的中心と化していく。それにもなつて、同水系には都市の発達がみられた。しかしこの時期においては、政治的・経済的成極は、同水系のデルタの頂点にあたる部分にあり、ムルシダバード・カシムバザール・プラッシーの三都市をむすぶ地域が重要であった。⑤ したがって、その成極は、決して現在のカルカッタを含む下流域ではなかったのである。先述したとおり、イギリス東インド会社も、一六五〇年代にカシムバザールおよびこの地域内の中心都市フーグリーに、いち早く商館を設置していくのである。スタニユティへの商館設立は、この両都市よりもはるかに遅れ、一六九〇年をまたなければならなかった。

(4) カルカッタの成立

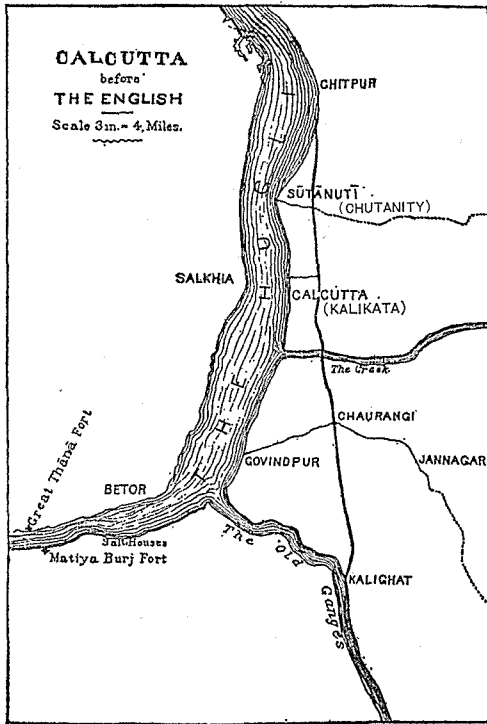
冒頭のキップリングの詩にもあきらかなように、カルカッタの成立は、チャーノックの名とわかちがたくむすびついている。まずはじめに、彼のベンガルでの活動をたどりつつ、スタニユティ商館設立の経緯について、ややくわしく検討す

ることにはしたい。

チャーノックは、一六五五年か一六五六年に、東インド会社吏員としてインドにやってきた。^②一六五七年の記録では、彼は、カシムバザール商館の下級参事としてあらわれる。一六六四年には、パトナの商館長に任ぜられ、一六八〇年までその地位にあった。一六八〇年に、彼は、パトナから当時最大の交易中心地であったフーグリ商館に転ずる。^③八〇年代にはいると、東インド会社と現地政府との利害対立が激化し、抗争へと発展することが多くなった。とくに一六八四年以降、その対立は一層はげしくなり、二年後の八六年には、フーグリでベンガル大守(Nozd)とイギリス人との衝突が発生する。このときチャーノックは、二カ月間フーグリに留まったのち、チュタニティ(Chuttanitia、スタニユティのこと)に退去した。これが、カルカッタを、彼ひいてはイギリスにむすびつける最初のきっかけであった。チュタニティの名がでてくるもっとも古い現存文書は、一六八六年十二月三十一日付の、チャーノックほか三名連署の会社あて報告である。^④そのなかで、チャーノックは、チュタニティがフーグリよりも安全である、と述べているといわれる。このとき、彼らは、チュタニティに一時滞在用の小屋をたてたが、すぐ大守により追いはらわれた。翌八七年にも、チャーノック一行は、再度チュタニティを占拠し、およそ一年間そこに留まったようである。^⑤

チャーノックにとつては、チュタニティは、ベンガルにおける東インド会社の根拠地として最適の地であったらしく、彼は、たびたびそのむね会社に上申したようである。すなわち、彼の文書そのものはのこっていないが、一六八八年二月十五日付の参事会からマドラスの要塞あての書状には、つぎのような一文がふくまれている。^⑥

「われわれは、ムガール帝国の全域にわたって平和が持続するであろう、と確信している。それゆえに、カシムバザールとマルダの商館——そこで、これまでわれわれは最良の収益を得てきた——に、チャーノックが再着任するのが早ければ早いほど、それは会社にとって望ましいことである。しかし、彼がチュタニティをそんなに好んでいるのなら、そこに商館を設置することにはわれわれは同意を与えよう。けれども、その商館は、かなりつつましい規模のもの



第2図 カルカッタ建設前（17世紀中期）の状況

となろう。』
 チャーノックも、一六八九年九月三十日付のマドラスあての文書において、チュタニティが、フーグリ川をさかのぼった最良かつ最適の位置を占めており、そこを根拠地として選定したことを報告している^⑧。しかしこの選定に対して、会社は全面的な同意を与えなかったようである。選定後の一六九一年十一月二日付で、マドラスから発せられた書状に、つぎのような一節がみいだされるからである。

「チャーノックは、チュタニティのような防禦施設のないところにおいて、われわれの分別ある判断、すなわち、そこでの商館の建設も、また商人の定住と交易も認められないが、そのかわりに、フーグリから二マイル下流のもっと便のよいところを提供しよう、というわれわれの一致した意見に、反対しつづけている」。

以上のような経緯が前後するなかで、一六九〇年七月に、チャーノックは三たびスタニユティにやってくる。ついに同年八月二十四日に、そこに東インド会社の商館が設立される。これが、現在のカルカッタの淵源とされている。すなわちカルカッタは、東インド会社当局の反対にもかかわらず、チャーノック自身の手により選定されたのである。

当時のカルカッタの状況は、第二図に示めされる。フーグリ川東岸の現在のカルカッタの地には、北からスタニユティ（チャーノック

クというチユタニティ・カリカタ (Kalikata) のちに Collocota とつづられ、現地名の淵源となる)・ゴビンダプールの三集落がならんでいた。いずれも、フーグリ川に平行する微高地上に立地する小集落であった。微高地上では、米のほか綿が栽培された。綿花は、村内の職人によって、綿糸・綿布に加工されていた。^④

同図南のカリガート (Kaligat) には、カーリ寺院があり、そこはヒンドゥ教徒の聖地であった。同寺院については、一五四五年刊行のマナサ マンガル (Manasa Mangal) がふれているが、当時はそれほど重要な聖地ではなかった。しかし十六世紀末になると、カリガートは、多くの巡礼者を集める聖地へと成長していった。^⑤ 同図上で、チトプールの南方から、スタニユティ・カリカタを経て南に延びる道路が、カリガートへの巡礼道路であった。巡礼者たちは、チトプールの南で舟を降りて、同道路を徒歩でいくのが普通であり、一年を通じて、巡礼者の往来は絶えなかったといわれる。この巡礼道路の存在が、のちにスタニユティへの商業機能の集積に役立つ。

フーグリ川は、かつてのガンジス川本流にあたる。ガンジス川本流は十五世紀に東遷して、北西——南東方向の現流路をとるまでは、ここを流れていた。そのころのガンジス川本流は、フーグリ川を経て、図中に古ガンジス川 (The Old Ganges) と記された流路をとっていた。そのため、現在も、フーグリ川と古ガンジス川は、ヒンドゥ教徒にとって聖なる川であり、前記の聖地カリガートもその河岸に位置していたのである。フーグリ川は、図にみられるように、ゴビンダプールの南で西へ大きく曲流する。この曲流のために、フーグリ川の流速はよわまって、そこから上流には沈泥の推積がすみ、浅瀬が形成されていた。そのため、ゴビンダプール付近から上流部への外航船の航行は、不可能であった。カルカタは、まさしく外航船舶の廻行限界を占めていたのである。いちはやくフーグリ川へ進出してきたポルトガル人も、図中のベトール (Beton) 付近で外航船を停泊させ、そこから上流へは小舟によって廻行していた。^⑥ ポルトガル人の往来が活発になるにつれて、ベトールは、停泊地・積替地として重要性をたかめ、そこに市場がひらかれるようになった。ベトールでの交易の発展に誘引されて、対岸のゴビンダプールにも商人カーストが来住してきた。その中心メンバーは、バサク

(Bask) 四家族、セツト (Seth) 一家族の、計五家族であった。彼らは、周辺の織布工が作りだす綿製品の市場を、スタ
ニユティに開設した。^④これが、スタニユティへの最初の商業機能の立地であった。スタニユティがえらばれたのは、そこ
がフーグリ川に面しているうえに、前述のカリガートへの巡礼道路上にあって、交通位置がすぐれていたからであろう。
十六世紀中期になると、ポルトガル人は根拠地をより上流のフーグリに移したため、ベトールの商業機能は衰退した。そ
れにかわって、スタニユティがこの一帯の交易地として登場していった。

当時、スタニユティには、週二回の定期市がたち、綿製品や食料品が取引された。^④しかし、スタニユティの市場として
の重要性は、フーグリやカシムバザールなどにくらべると、問題にならないほど小さく、低次な中心地機能をもつにすぎ
なかつた。

このようなスタニユティに注目したのが、チャーノックであった。彼が、スタニユティを東インド会社のベンガルでの
根拠地に選定した理由として、インド帝国地誌 (Imperial Gazetteer of India) は、^⑤以下の四点をあげている。

- 一 外航船舶の遡行限界にあたること。
- 二 外航船舶をそこに停泊させることによって、それらが塔載している大砲を防禦用に活用しうること。
- 三 自然堤防上にあつて、西にフーグリ川、東に低湿地・沼沢地をひかえているため、防禦が容易なこと。
- 四 フーグリ―バーギラティー水系を通じて、ガンジス川流域平野とむすばれ、同平野のゆたかな物産への門戸とな
りうること。

これら四点にくわえて、そこがフーグリ川の曲流点にあたるため、水深が大であること、^⑥また上述の巡礼道路の存在と
スタニユティにおける商業機能の興隆があつたと思われる。なかでも重視されたのは、上述の理由二および三であつたで
あろう。なぜなら、後述するように、ベンガルにおける要塞化された商館の建設は、東インド会社の長年にわたる悲願で
あつたからである。

右にみたように、チャーノックによるスタンニユティの選定は、会社当局の反対があったにしても、綿密な軍事的・商業的観点からの検討をふまえてなされたといえよう。したがって、チャーノックがあたらしい根拠地としてスタンニユティをえらんだのは、偶然の所産であるとする見方——冒頭のキップリングの詩もその一つである——は、しりぞけられなければならない。たとえば、そこに樹陰をつくる大木があって、そのもとで彼ら一行は昼休みをとり、水きせるを楽しんだからである、という一般に流布している見解^④は、俗説であるといわざるをえない。まさしくカルカッタは、東インド会社のベンガル戦略にのっとり、チャーノックにより選定されたのである。この点についてふれるならば、一六八〇年代末における東インド会社のベンガル戦略は、つぎの二つからなりたっていた。

(a) ベンガル大守との利害対立が激化するなかで、空洞化しつつあった東インド会社の既得諸特権——たとえば、一六五一年の前記特許状——を再確認させて、ベンガル交易を有利に展開すること。

(b) そのために、東インド会社の根拠地を要塞化して、軍事的安全を確保すること。^⑤

とくに、ボンベイ・マドラスとならぶ要塞をベンガルに建設して、これら三要塞の保護のもとに、イギリスのインド貿易を末長く安定させるといふのは、東インド会社取締役会(Court of Directors)会長チャイルド(Child)の長年にわたる願望であった。^⑥

まず、(a)の既得諸特権の再確認は、一六九一年の皇帝アウランジーブ(Aurangzeb)の勅許によって、実現された。^⑦

(b)の要塞化された根拠地の建設は、一六九〇年以降、ベンガル大守との交渉がくり返されてきたが、一六九六年にいたって、ブルドワン(Burdwan)の領主ソバーシン(Soha Singh)の反乱を契機に実現された。この乱に際して、イギリスはベンガル大守を助け、共同してソバーシンの軍勢をうちやぶった。それへの恩賞として、ついに東インド会社は、カルカッタに小要塞を建設する許可を獲得した。さらに、一六九七年の皇孫アジーム・アス・シャー(Azim-us-Shah)のベンガル入部の際に、東インド会社は、現在のカルカッタ主部にあたるスタンニユティ・カリカタ・ゴビンダプールの購入許可

をえた。その範囲は、これら三村をふくむフーグリ川東岸ぞいの、南北四・八キロメートル、東西一・六キロメートルのわずかな区域にすぎなかった。しかしこの購入許可は、東インド会社ひいてはイギリス帝国とムガル帝国との関係に、重要な意味をもつものであった^④。

まず、その購入によって、東インド会社は、永代固定地税、年額一、一九五ルピー（一三〇ポンド）の納入とひきかえに、ザミンダールとしての法的な地位と権利を獲得した。それは、東インド会社に地代取得という、安定した新しい収入源を保証するものであった^⑤。同時に、この土地所有権の取得によって、そこに要塞化された商館を建設し、それを永続的に保持しうる途がひらけたのである。租借地では、このような永続的な要塞維持は、困難であったからである。それゆえに、三村の購入は、東インド会社に対してベンガルにおける軍事的な安全をも保証するものであった。

以上のように、三村の購入許可は、法的・経済的・軍事的に、東インド会社のベンガルでの地位をたかめた。その購入を契機として、東インド会社は、そこに本格的な要塞と商館とを建設して、カルカッタを、ベンガルにおける交易中心地たらしめていく方針を決定する。一六九六年には、ウィリアム要塞(Fort William)——ウィリアム三世にちなんで命名——の建設が着手され、一七〇二年に完成する。また、商館も一六九八年に建設された。こうしてベンガルにおける要塞化された商館と居留地の建設という、東インド会社の長年の夢が、カルカッタにおいて実現されるのである。

- ① 井関弘太郎『三角州』、東京、昭和四七年、一八三ページ。
 ② Gadgil, R. D.: The Industrial Evolution of India in Recent Times, Oxford, 1933. (邦訳 二〇〇ページ)。
 ③ Prakash, I.: Organization of Industrial Production in Urban Centres in India during the 17th Century with Special Reference to Textile, (in Ganguli, B. N. ed.: Readings in Indian Economic History, Bombay, 1964, pp. 44~52.)
 ④ Bhattacharya, S.: The East India Company and the Economy of Bengal from 1704 to 1740, London, 1954, p. 181.
 ⑤ *Ibid.*, p. 182.
 ⑥ Chaudhuri, K. N.: The Structure of Indian Textile Industry in the Seventeenth and Eighteenth Centuries, *Indian Econ. Soc. Hist. Rev.*, Vol. 11—2, 3, 1974, p. 134.
 ⑦ 西村孝夫『インド木綿工業史』、東京、一九六六年、七六～七七ページ。
 ⑧ Bhattacharya, S.: *op. cit.*, p. 185.

① 一六七〇～一七二一年～一七〇四～〇五年のうち、資料の得られる十一年間について、シラホールに入港したインド船の出立地をみれば、合計一九隻中、キルディンが三四隻、シリランカが二一隻を占めてゐる。シラホールがこの両地方との交易に特化してゐたことを物語つてゐる。(Prakash, O.: The European Trading Companies and the Merchants of Bengal 1650～1725, *Indian Econ. Soc. Hist. Rev.*, Vol. 1—3, 1964, p. 43, Tab. III 44を参照)。

② Bhattacharya, S.: *op. cit.*, pp. 189～192.

③ Das Gupta, J. N.: India in the Seventeenth Century, as depicted by European Travellers, Calcutta, 1916, p. 227.

④ Bhattacharya, S.: *op. cit.*, pp. 77～99.

⑤ Prakash, O.: *op. cit.*, p. 38.

⑥ シンガポールの商館が一八二五年まで存続してゐた。(Spate, O. H. K. and Learmonth, A. T. A.: India, Pakistan and Ceylon, London, 1967, p. 593).

⑦ 秋草 実「十七世紀のイギリス東印度会社のシンガポールの難出」『東洋経済研究』第四卷 昭和十五年 三三四～三三六。

⑧ Ray, I.: The French Company and the Merchants of Bengal (1680-1730), *Indian Econ. Soc. Hist. Rev.*, Vol. 8-1, 1971, pp. 41～42.

⑨ シンガポールの難出を記した著書として、この著書も挙げたい。

Bhattacharya, S.: *op. cit.*, p. 18 ff.

Das Gupta, J. N.: *op. cit.*, p. 110 ff.

Hedges, W.: The Diary of William Hedges, Esq., during his agency in Bengal; as well as on his voyage out and return overland (1681～1687), Vols. 3, Hakluyt Series (First), No. 74,

75, 78.

西村孝夫『イギリス東インド会社史論』京都 昭和三五年 八〇ページ以下。

⑩ Dutta, K. K.: *Alivadi and His Time*, Calcutta, 1963, pp. 151～152. 以下を参照。この著書の中には(Collinda)『ベトナム(Buddha)』、ヒンディヤール(Elambar)『チェンナール(Radanagore)』、バラムガリ(Balaramguri)、『バラン(Burran)の六ヶ所』、ゴッパ、位置を確定するところではなかった。

⑪ 上記のベトナムなどは、その重要度が小さいものとして、Spate, O. H. K. and Learmonth, A. T. A.: *op. cit.*, p. 593.

⑫ Bowerly, T.: A Geographical Accounts of Countries round the Bay of Bengal, 1669 to 1679, Hakluyt Series, No. 12, 1905.

⑬ *ibid.*, pp. 167～169.

⑭ 一六七五年のシンガポールの派船されたマスター(Master)が『その日記の十一月一日の条で』著書「シラホールとノータリ」のなかでシンガポールの根拠地とするかたがとを論争があり、ノータリが最盛地たることを結論づけたことを記してゐる。(quoted by Das Gupta, J. N.: *op. cit.*, p. 220).

⑮ quoted by Calkins, P. B.: The Role of Murshidabad as a Regional and Subregional Center in Bengal, (in Park, R. L. ed.: Urban Bengal, Michigan State Univ., Asian Study Center, Occasional Paper, No. 12, East Lansing, 1969, p. 20).

⑯ O'Malley, L. S. S.: Bengal, Bihar and Orissa, Cambridge, 1917, pp. 140～150.

⑰ Tavernier, J.-P.: Travels in India, trans. by V. Ball, London, 1925, Vol. 1, p. 102.

⑱ シンガポールの難出を記した著書として、この著書も挙げたい。

叙述が简单なのは、彼がカシムム、ギールに滞在して、ムルシメットや
 等城の事を書きながらの事である。カシムム等 (Calikins, P. B.: *op. cit.*,
 p. 25)。

- ② Bhattacharya, S.: *op. cit.*, p. 132.
- ③ 西住善太 前掲 一七三～一七四頁。
- ④ Hedges, W.: *op. cit.*, Vol. 2, xiv, 447, Vol. 3, clxxxiv.
- ⑤ *Ibid.*, Vol. 2, xlviii.
- ⑥ *Ibid.*, lix.
- ⑦ *Ibid.*, lxxvi.
- ⑧ *Ibid.*, lxxv.
- ⑨ *Ibid.*, lxxxvi.
- ⑩ *Ibid.*, lxxxviii.
- ⑪ Ghosh, S.: The Urban Pattern of Calcutta, India, *Econ. Geo-*
gr., Vol. 26, 1956, p. 51.
- ⑫ Ghosh, M. et al. eds.: Calcutta, a study in urban dynamics,
 Calcutta, 1972, p. 2.
- ⑬ Sinha, S.: Kali Temple at Kalighat and the City of Calcutta,
 (in Sinha, S. ed.: Cultural Profile of Calcutta, Calcutta, 1972, p.
 62).
- ⑭ The Imperial Gazetteer of India, Oxford, 1909, Vol. 9, p. 262.

二 カルカッタの建設——十八世紀中期まで

(1) 建設当初のカルカッタ

チャーノック一行が、三たびスタニユティを占拠したのは、一六九〇年七月であった。それからほぼ一年を経過した一

- ⑮ Ghosh, M. et al. eds.: *op. cit.*, pp. 1~2.
- ⑯ *Ibid.*, p. 3.
- ⑰ The Imperial Gazetteer of India, Vol. 9, p. 263.
- ⑱ Spate, O. H. K. and Learmonth, A. T. A.: *op. cit.*, p. 593 頁
 ノルマディの戦田云々。
- ⑲ Hamilton, A.: A New Account of the East Indies, London,
 1927, Vol. 2, p. 5.
- ⑳ Martin, J. M.: Notes on the Medical Topography of Calcutta,
 (in India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 38).
- ㉑ Hedges, W.: *op. cit.*, Vol. 2, xlix~xlxi, lxxiii.
- ㉒ 西住善太 前掲 一三三頁。
- ㉓ Wheelers, J. T.: India under British Rule from the Founda-
 tion of the East India Company, London, 1886, pp. 25~26, 28.
- ㉔ 西住善太 前掲 一三三頁。参照。
- ㉕ Blyn, G.: Revenue Administration of Calcutta in the First
 Half of the 18th Century, *Indian Econ. Soc. Hist. Rev.*, Vol. 1-
 4, 1964, p. 121.
- ㉖ Bhattacharya, S.: *op. cit.*, pp. 218~219.
- ㉗ Blyn, G.: *op. cit.*, pp. 124~125.

六九一年に、マドラスのセント ジョージ (St. George) 要塞の文書に、つぎのような一文がみいだされる。^①

「彼ら(チャーノック一行)は、ベンガルではままたない生活を送っており、損害から自らを守るべき安全な倉庫ももっていない。彼らは、チュタニティでは、無謀かつ不安定な状態で暮している。武装した家屋も、倉庫もなく、あるのはテントと掘建小屋と小舟、および約一〇〇人の未熟な兵士たちのみである」。

これが、今日三〇〇万人以上の人口を数えるカルカッタの発端であった。

チャーノックは、定着後まもない一六九三年に、スタニユティで死亡する。当時、スタニユティには、つぎのような十戸の家屋群からなるイギリス人集落がつくられていた。^② すなわち、倉庫——一、食堂——一、厨房——一、布地仕分け棟——一、事務所——一、会社吏員用アパート——一、総督代理(故チャーノック)・ピーチャム(Peacham)・エリス(Ellis)の家宅——各一、営所——一、の計十戸であり、いずれも土壁わらぶきの家屋であった。

この二つの記録からうかがえるように、スタニユティは、恒久的な集落というよりは、一時的な集落としてスタートした。貧弱な住居にくわえて、衛生上の悪条件が増幅的に働いて、スタニユティの居住条件をますます悪くしていった。それは、ここが、マラリアやコレラをはじめとする、熱帯性諸疾病の蔓延地であったためである。すでに述べたように、カルカッタの選定にあたっては、西にフーグリ川をひかえ、東に塩性湿地をいざくという防衛上の利点があげられた。しかし、この軍事的観点からする利点は、保健衛生上からみれば、まったく逆の悪条件へと転化するのである。たとえば、一七〇八年にカルカッタに來住したハミルトン(Hamilton)は、「インドのどの川においても、これ以上の非健康地をえらびようがない」と述べるほどであった。^③ 彼は、滞在中、八月から翌年一月初めまでのおよそ五ヵ月間に、当初一、二〇〇人いたイギリス人のうち四五〇人が死亡し、埋葬されたこと、また乾期になって東方の塩性湿地が干あがったときに、死んだ魚のたまらない悪臭が町を覆ったこと、などについて記している。^④

事実、気候風土の悪さを理由に、チャーノックの死後、ロンドンの東インド会社当局あてに、スタニユティを放棄して

他に移転したいという申請が出されている。しかし、同会社当局は、「ベンガルでスタニユティだけが、氣候がわるいとはいえない」との理由で、この申請を却下している。^⑤したがって、一六九五年ごろには、東インド会社は、カルカッタをベンガルにおける根拠地たらしめていく方針を決定していたのであろう。

カルカッタの都市形成への第一歩は、ウィリアム要塞の建設であった。その建設地は、スタニユティの南、カリカタの地に求められた。カリカタには、すでにふれたように集落があり、主として農民と漁民が居住していた。彼らを、スタニユティやその北方のソバー・バザール(Sohā Bazar)、南東のタルタラ(Talala)、クマルチュリ(Kumartuli)およびゴビンダプールに代替地をあたえて退去させ、その跡地にウィリアム要塞を建設した。^⑥彼らの移転先は、後のインド人居住地区の核心となっていく。

ウィリアム要塞の建設地として、それまでのイギリス人居住地であったスタニユティではなく、カリカタが選定されたのは、つぎの二つの理由によるものと思われる。第一は、カリカタが三集落の中央に位置しているため、防禦に好適なところ、第二は、カリカタにおいて自然堤防の発達がもっとも進んでいるため、比較的高燥な地を求めうること、^⑦の二点である。

ウィリアム要塞は、まわりに、東西両辺が約二一〇メートル、北辺が約一〇〇メートル、南辺が約一五〇メートルの台形状の城牆をめぐらせていた。城牆は、レンガをモルタルでかため、さらに上塗りをした堅固な構造のものであった。要塞内には、中央を東西方向に東インド会社の職員用住宅がならび、その北には兵器庫・弾薬庫・薬品庫が、南には商館と石造倉庫があったといわれている。^⑧同要塞の建設により、スタニユティのヨーロッパ人たちは、その周辺に移動してきた。カリカタの外国人集落には、イギリス人だけでなく、当時ベンガルで覇権をうしなっていたポルトガル人が多く住みついた。^⑨最初のポルトガル人は、早くも一六八九年に、スタニユティに來住してきた。カリカタへの移転に際して、彼らは、東インド会社からウィリアム要塞北方の土地を与えられた。ポルトガル人は、一七〇〇年には、そこにカトリック教会を

建設している。

要塞と商館につづいて、カリカタには、病院(一七〇七年)、アングリカン教会(一七〇九年)、公園などが、建設されていた。その結果、十八世紀初頭には、ウィリアム要塞をとりまいて都市的集落の形成がすすみ、そこは、後にいうホワイトタウン——ヨーロッパ人居住地区——の都市核となった。ヨーロッパ人地区のうち、北部には、ポルトガル人やアルメニア人など、イギリス人以外のヨーロッパ人地区が、形成されていたようである。一方、ベンガルを中心に、インド人も各地から参集してきた。彼らは、主として、スタニユティとカリカタ北部に住みついていった。したがって、成立の当初より、カリカタには主としてヨーロッパ人が、スタニユティにはインド人の商人階級が、ゴビンダプールにはインド人の下層階級が居住する、という居住分化がみられた。前出したハミルトンも、川ぞいにイギリス人が、また内陸部にはインド人が居住していると述べている。^⑩

カリカタの発展を反映して、一七〇七年には、カリカタは、タウン カリカタ(Town Kalkata)とバザール カリカタ(Bazar Kalkata)に分割された。前者は、ウィリアム要塞に接するイギリス人地区に、また後者は、北部の商業地区にあたる。以後の都市的発展の中心となったのは後者であり、その商業的機能は、今日のブラバザール(Brahm Bazar)などにひきつがれている。同年の調査によると、建物敷地面積は合計二八〇エーカーで、全面積(一、六九二エーカー)のおよそ十七パーセントにあたった。その地区別内訳は、バザール カリカタ——一三四エーカー、タウン カリカタ——八二エーカー、スタニユティ——四五エーカー、ゴビンダプール——十九エーカーであり、^⑪両カリカタでの建設の進行がいちじるしい。またハミルトンは、一七一〇年の人口を一〇、〇〇〇〜一二、〇〇〇人と推定している。^⑫したがって、ウィリアム要塞の建設に着手してからわずか十数年にして、カルカッタは、寒村から都市とよびうる段階にまで発展したのである。しかし、一七〇七年には、なお農地などが全面積の五二パーセントを占めていただけでなく、^⑬港としての機能もフリーグリにくらべてなお劣っていた。^⑭

第2表 18世紀中期におけるカルカッタの主要後背地

品 目 名		綿	モ	キ	そ	絹	絹	綿	そ	硝	イ	砂	ア	ワ
都 市 名		反	ス	ヤ	他	糸	反	網	他	石	ン	糖	ヘ	タ
		物	リ	ラ	綿	糸	物	布	綿		デ		ン	
ベ ン ガ ル	カシムバザール			○		○	○							
	ダッカ		○											
	ジュグディア			○	○									
	ラクシュミプール			○	○									
	マルダ		○							○				
	ボアリア		○							○				
	クマルカリ		○											
	サンティプール		○	○	○							○		
	ミドナプール	○	○								○			
	ラダナゴール	○			○							○		
	キールバイ		○	○	○				○	○				
	デーワンガンジ		○	○	○				○	○				
	ヴィッシュヌプール	○					○							
	サハバード										○	○	○	
	スーラル											○		
	バブナ											○		
	ファリドプール											○		
	ナディア											○		
	ジェソール											○		
	ムルシダバード				○		○	○	○			○		
テータ												○	○	
クーゴール												○	○	
サーラン												○	○	
ファトワ										○				
チャプラ										○				
アジムガール										○				
オリ ッサ	バラソール	○			○		○		○					
ビ ハ ー ル	バトナ	○					○			○	○	○	○	
	ティルハット										○	○	○	
	シンギヤ									○				
	ファラカバード										○			○
ウ ツ タ ル ブ ラ デ ー シ ュ	ベナーレス	○					○			○	○	○	○	
	アラハバード										○	○		
	アリガル										○	○		
	メーラト										○	○		
	アーグラ										○	○		
	バランドシャル										○	○		
	カンプール										○	○		○

(2) カルカッタを中心とする商業機能の展開
 カルカッタの初期の発展は、主として商業交易機能の拡充にささえられたものであった。とくに一七二七年に、ムガ

品名	都市名										
	ウツタル	バンデルカンド	ファテプール	ミルザプール	ジョンプール	ランプール	ジョワファール	エトワ	マ	ラックノ	その他綿製品
ワタ	○	○	○	○	○						
アヘン									○	○	
砂糖											
インディゴ											
硝石										○	○
その他綿製品											
絹反物											
絹糸											
モスリン											
綿反物											

(Gosh, M. et al. eds.: *ibid.*, pp. 26~28, Dutt, K. K.: *ibid.*, p. 150 による)。

ル皇帝ファルクシヤル (Farukhsiar) が、勅令 (ファルマン、Farman) を発して、東インド会社への内陸関税の免税特権を再保証したことが、カルカッタの商業活動をいっそう高める契機となった。

当時の東インド会社の対ベンガル貿易は、インド側の出超であった。同会社が、金銀塊 (bullion) —— とくに銀塊 —— の輸入によって入超を決済するという形で、貿易はおこなわれていた。カルカッタは、その決済の場として、次第に重要性を増していった。^⑤したがって、同会社のベンガルへの金銀塊の輸入額をもって、カルカッタの商業機能の拡充を示す指標とみなしえよう。同輸入額は、一七〇八〜一七七年の十年間には、七七二、五二〇ポンドであったが、つづく一七一一〜一七二七年の十年間には、一、三三一、五二九ポンドへと増大している。^⑥こうした東インド会社の商業活動の隆盛にともない、カルカッタにも各種商人が来住し、人口も加速的に増加していった。この間の関係を、イギリス人の目から、スチュワート (Stewart) は、誇らしげに述べている。^⑦

「商業の成功は、あたらしい冒険者をつくり出した。東インド会社からライセンスを与えられたイギリス人の個人商人にくわえて、短期間にポルトガル・アルメニア・ムガール・ヒンドゥ商人たちが集まってきた。彼らは、イギリス国旗のもとで商業に従事した」。

各種資料によって、この時期にカルカッタを通じて集散された、諸物産の生産地をかかげれば、第二表のとおりである。^⑧同表によって、すでに十八世紀中期ごろには、カルカッタの物資集散圏が、ベンガルを中心にガンジス川中流域にまで及

んでいたことが知られる。その主要商品は、ベンガルでは各種の綿・絹製品、ビハールでは硝石・インディゴ・砂糖・アヘン、さらに上流の現在のウツタル プラデーシュではインディゴ・硝石・ワタであった。同表から、ガンジス川をさかのぼるにつれて、主要商品が、繊維工業品から第一次産品へと変化していくさまを、よみとれる。ちなみにこの集散圏のひろがりには、バングラデシュを除いた、今日のカルカッタの物資集散圏と大体において一致している。^②カルカッタの後背地は、十八世紀中期には、ほぼ形成されていたといえる。

(3) 十八世紀中期のカルカッタ

一七四〇年前後に、カルカッタは、二つの大きな変化を経験する。

第一は、一七三七年秋のサイクロンの来襲に際し、同時に地震にも見舞われるという二重災害の発生である。このときの暴風のすさまじさは、六十トンのバーク型帆船が、約十キロメートル内陸までうちとげられた、という記録によってもうかがわれる。^③カルカッタのうけた被害は大きく、木造くさぶき家屋のほぼ全部と、十分な基礎をもたないレンガ造の建物の多くが倒壊し、死者三、〇〇〇人におよんだ。^④この災害以後、レンガや石づくりの家屋が増加し、カルカッタの都市景観がより恒久的なものになったといわれる。

第二は、一七四二年のマラータ(Maratha)のベンガル侵入であった。当時、彼らの軍勢は、中央インドを席捲しつつ、ベンガルにまでもおよんできた。彼らを避けてカルカッタに来住するものが多く、それが、この時期におけるカルカッタの人口増加を加速化させる一因となった。^⑤とくに、ベンガル人の富裕階級に来住するものが多かった。

東インド会社は、マラータ対策として、ベンガル大守を刺激しない範囲内で、防禦施設の建設を決定する。^⑥それは、二つの内容からなっていた。一つは、ウィリアム要塞周辺の主要道路に砲台を新設することであり、他は、砲艦タイグレス(Tigris)号をスタニューティに停泊させて、フーグリ川上流からの侵入にそなえることであった。東インド会社としては、この二つ以上の措置は不必要だとした。その理由として、同会社はつぎの三点をあげた。^⑦

(a) あまりに好戦的な防禦策は、ベンガル大守をいたずらに刺激する結果となること。

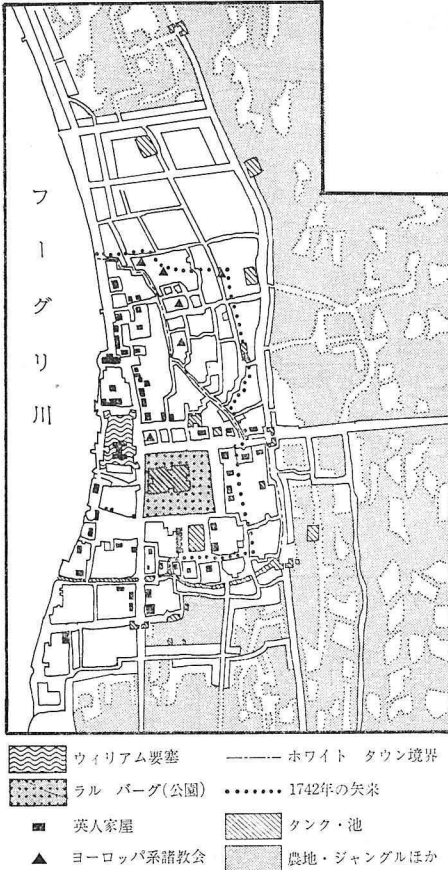
(b) 防禦にあまりに多くの資金を費消すべきでないこと。

(c) これ以上の防禦策を講じて、それは、結局インド人商人の保護に役だつのみであり、東インド会社の財産保全のためにはこれで十分なこと。

ここにあげられた理由、ことに(c)のなかに、植民地都市としてのカルカッタの性格が如実にあらわれていよう。

その結果、無防備のままに放置されることになったインド人からは、みずからの費用でカルカッタの周縁に濠をめぐらすことが、提案される。東インド会社は、その建設を許可する。周濠の位置は、時代はくだるが、第五図にしめされる。それは、スタニユティ北方(現在のバグ＝バザール Bag-Bazaar)から、東インド会社の所有地の境界にそって、フーグリ川と古ガンジス川との分流点までの、約十一キロメートルにわたって建設される予定であった。着工後六ヵ月間に、北東辺にあたる約四キロメートル分だけが完成した。この周濠は、マラータ濠(Maratha Ditches)とよばれた。ここで、マラータ濠が、インド人により発議され、彼らの費用で建設されたこと、また、北方の部分から建設されていたことに注目したい。当然のことながら、それは、インド人地区の防禦用施設であった。とすると、一七四二年当時、インド人地区は、マラータ濠を必要とするほど内陸部にまで広がっていたことを推測させる。事実、この時期に、第五図の下線をひいた村々では荒蕪地の開発がすすみ、市街地が成立していったとされている。それは、まさしく上の推測に対応するインド人地区の拡大であったのであろう。

一方、イギリス人地区でも、マラータの脅威がたかまるにつれて、矢来の建設がすすめられた。その位置は、第三図に示される。マラータのベンガル侵入を契機とする砲台・矢来・周濠の建設は、カルカッタに対して、従来の商館の要塞化から、都市そのものの要塞化へという新しい局面をひらいた。しかし、この段階では、その転換がきわめて不十分にしかおこなわれなかったことは、一七五六年、ベンガル大守シラージ＝ウダウラー(Suraj-ud-Dowla)のカルカッタ急襲の際に

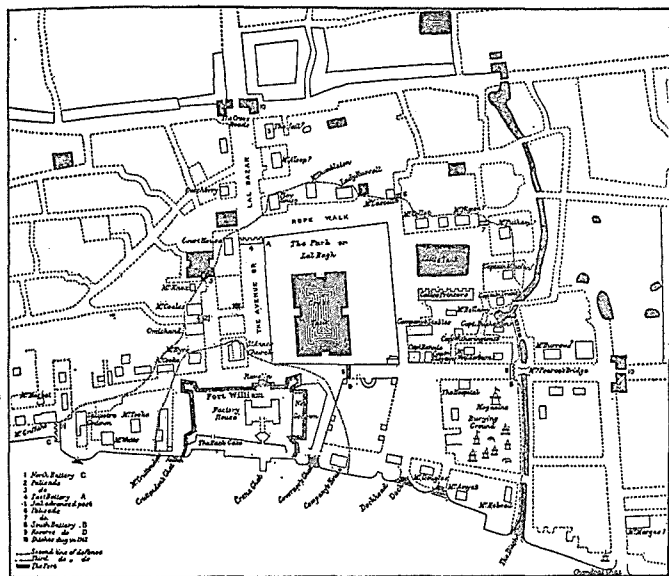


第3図 1757年のカルカッタ

露呈された。彼は、六月二十日にカルカッタを占領して、アリナガール (Alinagar) と改名した。以後、翌五七年一月に奪回されるまで、カルカッタは彼の占領下におかれた。シラージウダウラーの攻撃に対して、上述した諸防禦施設は簡単に突破されたうえに、ウィリアム要塞の火砲も、周辺の建造物に妨げられて有効に使用しえなかった。つまり、ウィリアム要塞は、本来の要塞としての機能を十分に發揮することなく陥落したといえる。この点の抜本的な改造が、奪回後のカルカッタ再建における基本的命題となる。それを通じて、カルカッタの都市構造も大きく変貌していくのである。

現在、カルカッタのもっとも古い地図として、シラージウダウラーの急襲時の地図が残っている。第三図が、それである。しかし同図は、当時の都市域全体を示したのではなく、カリカタ全域とスタニユティ南部とを記載するにすぎない。また同図には、道路や縮尺はいっさい記入されていないので、一七九二年図・一八八八年図・一九二三年図や現在の

ガイド マップを参照しつつ、検討をくわえることにしたい。道路についてみれば、北辺は、K・K・タゴール (Tagore) 道路 (旧名シユリハリラム道路 Sri Hari Ram St.) に比定しうる。東辺は、すでにふれたスタニユティからカリガートにいたる巡礼道路で、現在のラービンドラサラニ (Rabindra Sarani) 道路 (旧名下チトプール道路 (Lower Chitpur Rd.) に対



第4図 1757年のカルカッタ中心部 (左方が北)

応する。東南辺には濠がほられ——のちに埋立られ、キロンサンカールロイ (Kiron Sankar Roy) 道路 (旧名ヘイスティンクス道路、Hastings St.とウォタールー道路 Waterloo St.)となる——、また南西辺は、より南のオークランド道路 (Ankland Rd.)にあたっている。これらをもとにして、推算すれば、図に示される市街地の面積は、南北およそ二、一〇メートル×東西およそ七〇〇メートルの約一・五平方キロメートルと考えられる。先述の一七〇七年のデータは家屋敷地面積であるから、直接的な比較はできないけれども、その面積は、両カリカタとスタニューティ——第三図はその南部のみを記載——とをあわせたとしても、〇・二平方キロメートルにすぎなかった。両者の比較は、いずれにせよ、十八世紀前半におけるカルカッタの急激な成長を推察させるに十分である。

すれば、同図に記入したとおりである。その範囲は、ウィリアム要塞をはじめとする東インド会社の諸施設、およびイギリス人住宅の分布範囲とほぼ一致する。しかしその境界は、一七四二年の矢来の建設場所とは一致しない。とくに北部では、矢来は、ホワイトタウンの範囲を大きくはみ出して建設されている。時代は下るが、一九二三年測量図によってヨーロッパ系の宗教施設の分布をみれば、同図に示したように、ポルトガル教会 (カトリック)・ユダヤ教会・アルメニア

教会・ギリシヤ正教会などが、この地区に所在している。すなわち、矢来とホワイト タウンにはさまれた地区は、イギリス人以外のヨーロッパ系住民の集住地区であったようである。したがって矢来は、イギリス人だけでなく、ヨーロッパ人全体を保護する目的で、建設されたのであろう。矢来の外側は、インド人地区にあたっていよう。インド人地区は、北方では連担市街地を形成していたが、東方ではジャングルや水田内をスプール状に散在しつつ拡大し、マラータ濠にまでおよんでいたと思われる。以上のように、矢来やマラータ濠の建設は、はからずも、十八世紀中期におけるイギリス人地区・ヨーロッパ人地区・インド人地区、という空間的セグリゲーションの進展を推測させるのである。

市街地の構成をみよう。まず、道路割の不規則性が目につく。ウィリアム要塞を中心とした主部のみを拡大しても(第四図)、要塞の前面にはエスプラナードもなく、グリッドパターンに代表されるような規則的な町割もみとめられない。一七〇八年に滞在したハミルトンも、カルカッタの自然発生的な形成過程について、すでにつぎのように書きしるしている。^④

「家を建てるときには、なによりも自分の都合のいいようにするため、町は無秩序に建設されている。そのとき願慮されるのは、どこが庭づくりにもっとも適しているかということである。そのため、庭をとってから屋敷にはいる場合が多い」。

すなわち彼は、無秩序にコンパウンド(屋敷地)がたちならぶさまを述べているが、その叙述は、第四図の状況にそのまま妥当する。当然のことながら、グリッドパターンは、「一つの意志のもとで、当初から有機的全体として成立しているもので、個々の建物の恣意的な立地の合計としては生じ得ない」^⑤のである。

カルカッタは、イギリスによって建設された都市であるという歴史をもつにもかかわらず、その発展の端緒的な段階においてすら、計画的な町割をもたなかったのである。のちに、イギリスのインド支配が深化、確立していくにつれて、彼らがインド都市に対してくわえた改変の計画性と規則性とおもいおこすとき、これは、大きな相違である。ブラッシュ

(Brush) も、東インド会社時代にさかのぼるカントンメント (Cantonment 兵營地区) やシビル ステーション (Civil Station 官庁・官舎地区) のプランは一般に不規則であり、グリッドパターンへの偏愛が小さいことを指摘している。^⑧ おそらく東インド会社にとっては、初期カルカッタの建設は、あくまでも〈要塞化された商館〉の建設であつて、〈都市〉の建設とは意識されていなかったのであらう。また、それは、先述の一七四二年のマラータ対策(a)が示すように、ムガル王権を名目的にたてながら、商業的利益の追求をめざしていた、当時の政策を反映するものであるともいえよう。

しかし、ムガル朝時代の北インドの諸都市と比較すれば、カルカッタのイギリス的特徴は、なおみとめられる。それは、ウィリアム要塞東方に接する、ほぼ二七〇メートル×二六〇メートルのラルバグ (Lal Bagg 赤い公園の意で、現在のダルフージ広場 Dalhousie Square にあたる) の存在である。当時の北インドの主要都市は、都市構造のうえでイスラム的刻印をつよくとどめていた。ここでは、都市の分極機能を具現するものとして、王権所在地としての内城、交易の場としてのバザール、さらに内城とバザールの間には大衆祈禱の場としてのモスクの三つがあり、都市域のまわりには市壁をめぐらせていた。^⑨ これらの内城・バザール・モスク・市壁の空間的配置と、それらをむすびあわせる袋小路状の錯綜道路とは、インド亜大陸のみならず、ひろくイスラム圏の都市全般に共通する特徴であつた。ヨーロッパ都市と対比するとき、そのさらなる特徴は、オープンスペースの欠如にあり、インド亜大陸のイスラム都市もその例外ではなかつた。

しかし、カルカッタの場合、第四図に示されるように、オープンスペースとして、ウィリアム要塞の約二倍の規模をもつ公園が中心部に所在している。そこは、中央に用水池をもち、カルカッタの広場空間を構成していた。ラルバグの北西には、ウィリアム要塞に面してセントアン (St. Anne) 教会があつた。公園の南には、東インド会社の諸施設——更紗捺染場・うまやなど——が、また南西には、病院と墓地があつた。これらの諸施設をとりまいて、東インド会社のイギリス人吏員の屋敷地と家屋が点在していた。一七五三年には、要塞・倉庫をのぞいて、ここを中心に二三〇戸のレンガ造や石造の家屋があつたといわれる。^⑩

先述した矢来内部のヨーロッパ人地区では、人口の集住を反映して、すでに迷路状の錯綜道路が形成されていた。おそらく、その北のインド人地区も、これとおなじであったであろう。

図にみるように、市街地の外辺および中心部の主要道路には、計七カ所に砲台が設置されていた。先述した一七四二年のマラータのベンガル侵入時に、建設されたものである。

最後に、十八世紀中期の人口についてふれば、ホルウェル (Holwell) は、一七五二年の人口を四〇九、〇〇〇人と推定している。しかし、これは過大であると思われる^{②③}。ムケルジー (Mukherjee) は、一七三五年の人口を一〇万人としており、またシンン (Sinha) も、ベンガル大守アリベルディ (Aliverdi) の治政末期(一七五六年)の人口を約一〇万と推定している^{②④}。一八三〇年代の人口が約二〇万人であることを勘案すれば、このころの人口は一〇万人前後とするのが妥当かと思われる。それでも、十八世紀初頭から五〇年間に、人口はおよそ一〇倍に増加したことになる。そのため、一七四七年ころには、新たな人口へのスペースを見い出せないほどであったという^{②⑤}。ムガル帝国の衰退とは逆に、カルカッタは暗雲のように成長していったのである。

- ① Hedges, W.: *op. cit.*, Vol. 2, lxxxvi.
 ② Ghosh, M. et al. eds: *op. cit.*, p. 9.
 ③ Hamilton, A.: *op. cit.*, Vol. 2, pp. 4~5.
 ④ *Ibid.*, p. 5.
 ⑤ Ghosh, M. et al.: *op. cit.*, p. 12.
 ⑥ Ghna, M.: Social Institution in a Municipal Wards in Calcutta, *Man in India*, Vol. 42, 1962, p. 181.
 ⑦ 十九世紀前半の記録に、雨期の満潮時における地区のみは浸水してなごたなごた、述べられる^{②⑧}。(India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 9)
 ⑧ Ghosh, M.: *op. cit.*, p. 13.
 ⑨ 十八世紀はじめには、英語とならんでポルトガル語が公用語として使用されるほど、ポルトガル人が多かった。(Bhattacharya, S.: *op. cit.*, p. 78)。
 ⑩ Murray's Handbook for Travellers in India, Burma and Ceylon, 8th ed., London, 1911, p. 64.
 ⑪ Hamilton, A.: *op. cit.*, Vol. 2, p. 6.
 ⑫ India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 21より算出。
 ⑬ Hamilton, A.: *op. cit.*, Vol. 2, p. 10.
 ⑭ Blyn, G.: *op. cit.*, p. 135.
 ⑮ Prakash, O.: *op. cit.*, p. 39.
 ⑯ Ghosh, M. et al.: *op. cit.*, p. 26.

- ① Bhattacharya, S.: *op. cit.*, p. 166.
- ② quoted by India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 38.
- ③ 「インセンヌを手えられた」とは「イギリス東インド会社領に居住を許されたの意である。(松井 透『近世英印関係小論』『史学雑誌』六二一七、昭和三八年、二四〇―二五二頁)。
- ④ この資料により作成。
- Dutt, K. K.: *op. cit.*, p. 152.
- Ghosal, H. R.: *Economic Transition in Bengal Presidency, Calcutta*, 1966, pp. 59-146.
- ⑤ たぐえが、中山晴美「カルカッタ―巨港都市を指向する巨大都市」(米倉二郎編『インド集落の姿貌』、東京、昭和四八年、所収)四一九ページの第十三・十四図を参照。
- ⑥ India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 38.
- ⑦ Bhattacharya, S.: *op. cit.*, p. 196.
- ⑧ *ibid.*, p. 214.
- ⑨ 山本達郎編『インマ史』、東京、昭和三五年、一四七ページ。
- ⑩ India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 25.
- ⑪ *ibid.*, p. 25 ff.
- ⑫ Ghosh, M. et al. eds.: *op. cit.*, p. 50.
- ⑬ *ibid.*, p. 50.
- ⑭ *ibid.*, p. 48.
- ⑮ Hamilton, A.: *op. cit.*, Vol. 2, p. 6.
- ⑯ 矢野一彦『都市インマの研究』、東京、昭和四五年、一一五ページ。
- ⑰ Brush, J. E.: *The Morphology of Indian Cities*, (in Turner, R. ed.: *India's Urban Future*, Berkeley, 1962, p. 62.)
- ⑱ Planhol, X. de: *Le Monde islamique, essai de géographie religieuse*, Paris, 1957, pp. 5-26.
- ⑲ 拙稿「ムムン」(高野史男ほか編『世界の大都市』、東京、近刊所収)。
- ⑳ Imperial Gazetteer of India, Vol. 9, p. 265.
- ㉑ 彼の推定を過大とする論者なげども。
- ㉒ India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 6.
- ㉓ Imperial Gazetteer of India, Bengal, Vol. 1, p. 396.
- ㉔ Bengal Presidency: Report on the Census of Calcutta, taken on the 26th February 1891, Calcutta, 1891, p. 15.
- ㉕ じがう Ghosh, M.: *op. cit.*, p. 99, 253 次頁参照。
- ㉖ Mukherjee, R.: *The Rise and Fall of the East India Company*, Berlin, 1958, p. 255.
- ㉗ Sinha, J. C.: *Economic Annals of Bengal*, London, 1927, p. 6.
- ㉘ Blyn, G.: *op. cit.*, p. 129.

三 カルカッタの再建と現都市構造の成立―十八世紀後半

カルカッタの新しい発展は、一七五七年にはじまる。この年は、イギリスのインド支配の歴史における転換点であるだけだけでなく、カルカッタの歴史においても重要な劃期となった。同年、カルカッタは、三つの大きな事件を経験する。それ

らは、

- (1) クライブ (Clive) とワトソン (Watson) による、シラージ・ウダウラーからのカルカッタの奪回。
- (2) 新大守ミール ジャファール (Mir Jafar) との講和条約にもとづく一、七七〇万ルピー (二一五万ポンド) におよぶ損害賠償金のとりたてと、カルカッタ周辺の土地所有権の獲得。
- (3) プラッシーの戦いで勝利。

とくに(3)は、イギリス東インド会社の覇権を確立させ、ベンガルの植民地化への飛躍的な一歩となった。これを契機として、東インド会社は、まさしく、「商人の会社」から「征服者の会社」へと変貌していく^②。したがって、この年にはじまるカルカッタの再建もまた、かつてとおなじベンガルでの商業根拠地を再建するのではなく、イギリスのインド支配の拠点を新しく建設する、という意味をもたざるを得なかった。カルカッタの性格が、大きく変化するのである。一七五七年以降の再建過程を通じて、今日のカルカッタの基本的な都市構造ができあがるとともに、本格的な都市化も発進していくのである^③。

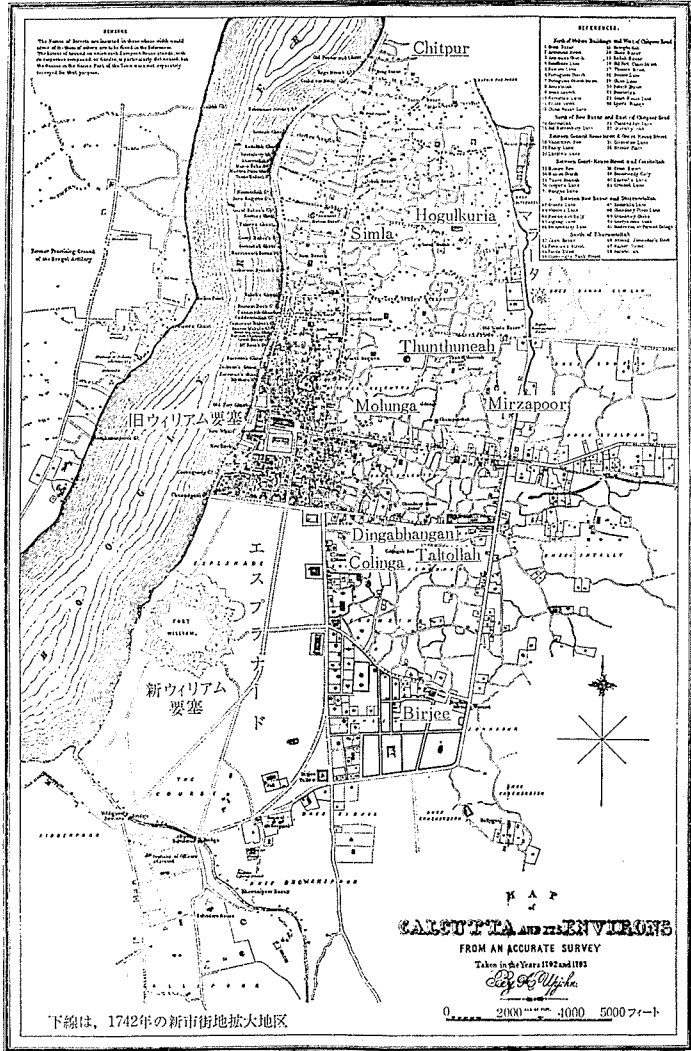
(1) 新ウイリアム要塞の建設と市街地の拡大

カルカッタの再建は、新ウイリアム要塞の建設からはじまった。旧要塞は、シラージ・ウダウラー軍の攻撃に際して、要塞としての機能を発揮することなく、完全に破壊された。新ウイリアム要塞は旧地を棄てて、市街地の南方のゴビンダプールに建設されることになった。カルカッタ奪回後、ただちにその設計が開始された^④。建設にさきだって、ゴビンダプールのクリアランスがなされ、そこにあった二つの集落も撤去された。

新ウイリアム要塞は、面積およそ二平方キロメートルにおよぶ星状形稜堡で、まわりに幅十七メートル、深さ一〇メートルの周濠をめぐらせる、という大規模なものであった。その内部は、兵士一〇、〇〇〇人を収容し、火砲六〇〇門をそなえていた^⑤。新要塞は、一七五八年に着工され、十五年後の一七七三年に完成した。その翌七四年には、カルカッタは、

英領インドの首都となる。新要塞の前面には、軍事的観点から、広大なオープンスペースが設けられ、エスプラナードと名づけられた。市街地も、エスプラナードの建設にともなって、南方へと大きく拡大していった。

第五図は、一七九二〜九三年のカルカッタの状況を示したものである。同図は、ヨーロッパ人住宅については詳細に記



第5図 1792〜93年のカルカッタ

載しているが、インド人地区についてはきわめて簡略にしか示していない。そのため、先述したホワイト タウンとその周辺をのぞいて、市街地が実体以上に空白のまま残されている点に留意する必要がある。たとえば、マーチン (Martin) の報告によれば、一七九三年の家屋・店舗数は、計七五、七六〇と推計されている^⑥。その民族別・宗教別内訳は、ヒンドゥ五六、四〇〇、モスレム一一、七〇〇、イギリス人四、三〇〇、アルメニア人六四〇、ポルトガル人およびその他のキリスト教徒二、六五〇、中国人一〇、となっている。したがって、ヨーロッパ系住民の所有になるものは、全体の約一〇パーセントにすぎなかった。いうなれば、第五図は、この一〇パーセントについては詳しく記載しているが、残りの九〇パーセントについては無視しているのである。おそらく、同図上の道路密度が大な部分には、図的表現以上に、市街地がはりついていたものと思われる。

第五図によって、つよく印象づけられるのは、新要塞とエスプラナードの規模の大きさである。エスプラナードは、南北三キロメートル、東西一・二〜二・〇キロメートルにおよび、その中央に新ウィリアム要塞をいざいでいる。同図上で、新旧両要塞の規模を比較すれば、新要塞の壮大さが明瞭である。その建設によって、カルカッタは、それまでの東インド会社の商館都市から、英領インドの政治的・軍事的首都へと変貌していくのである。

(2) イギリス人地区の拡大

新ウィリアム要塞の建設と、それにつづくカルカッタの性格変化は、地域構造をどのように変えていったであろうか。まず、それは、イギリス人地区の拡大となってあらわれている。

イギリス人地区は、かつてのホワイト タウンから二次的分散をとげ、外延的拡大がいちじるしい。それは、第五図に示したように、二方向においてみとめられる。第一は、エスプラナード南東方の当時のベリアル ストリート (Burial Street, 現、パーク ストリート Park St.) の南部における高級住宅地の成立である。一七八六年図によると、同道路以南には四戸の住宅が記載されているのみといわれており、そこが、一七九〇年前後に急速に高級住宅地と化していったこと^⑦

をうかがわせる。この地区には、グリッドパターン的な道路割と、広大な屋敷地をもつコンパウンド群とがひろがり、他の部分とはきわだつて異なった特徴を示している。

ベリアル グラウンド道路以南におけるイギリス人高級住宅地の成立につれて、同地区と都心部とをむすぶチョウリンギー (Chowringhee 現ネルー Nehru) 道路は、カルカッタの代表的な目抜き通りへと成長していった。チョウリンギー道路は、エスプラナードの東辺にそつて走り、かつての巡礼道路にあつてゐる。一七一七年には、同道路の周辺には水田・放牧地・荒蕪地がひろがり、わずか数戸ほどの小屋が同道路に面するにすぎなかつた、といわれている^⑧。第五図に示されているように、十八世紀末には、同道路の東側には、イギリス人を主たる顧客とする高級商店・ホテルがつらなるにいたつた。それらの建築群は、イタリアン建築家の基本設計になり、ヨーロッパ的な都市景観の創出をめざしたのである。

イギリス人地区の第二の拡大方向は、東方にむかつてであつた。とくに、エスプラナードの北辺からのびるダーラムタラ (Darumtala) 道路と、旧要塞正面から東へ直進するパウバザール (Bow Bazar) 道路とにそつて、拡大した。とくに後者の場合には、先述したマラータ濠をこえて東方にひろがり、シアルダー (Syaldah) 地区にまじり込んでゐた。

イギリス人住宅地区の拡大とならんで、官公庁以外の諸施設の郊外移転も進んだ。すなわち、監獄・病院・英人墓地などである。かつてホワイト タウンの東境にあつた監獄は、エスプラナードの南東隅に、またラルバーク西南の英人墓地の一角にあつた病院は、エスプラナードの南に (一七六八年)、おなじく英人墓地そのものも、ベリアル グラウンド道路の東端に移転 (一七六七年) した。また、エスプラナードを越えた南方には、ベルヴェルデルハウス (Belvidere House) ——一七〇〇年ごろにベンガル太守の別荘として建設されたが、十八世紀末には東インド会社高級吏員の邸宅として使用され、ついで一八五四〜一九一二年にはベンガル準知事 (Lieutenant-Governor) 官邸、一九一二年以降はインド副王のベンガル別邸として使用される——があり、エスプラナードを縦断する道路によつて、旧ホワイト タウンとむすばれて

いた。

以上のイギリス人住宅や諸施設の二次的な分散と並行して、旧ホワイト タウン南部地区への官公庁施設の立地が進んだ。旧要塞は税関に転用され、その東の旧アングリカン教会跡をふくむ地区には、東インド会社の下級吏員用の研修宿泊施設(ライターズビルディング Writer's Building)が建設された(一七七六年)。旧要塞南のフーグリ川ぞいには、造幣所が新設された(一七九一年)。さらに、旧ホワイト タウンの南境を越えたエスプラナードの北辺には、最高法院(Supreme Court)、参事会庁舎(Council Hall)、政庁(Government Hall)などの諸公共建造物が立ちならんでいった。後二者は、当初はベンガル知事官邸、一七七四年以降は総督官邸として使用された。

すなわち、イギリス人住宅や病院・墓地などの諸施設の郊外移転と、その跡地を充填する諸官公庁の立地を通じて、旧ホワイト タウンの南部地区は土地利用を純化させ、英領インドの管理中枢機能の所在地へと成長した。ここにも、ベンガルの商館都市から英領インドの政治的首都へという、カルカッタの性格変化が刻印されている。今日も、この地区には諸官庁が集中し、カルカッタのCBDの核を形成する。

これに対して、旧ホワイト タウンの北部地区は、以前とおなじく、イギリス人のほかポルトガル人・アルメニア人などのヨーロッパ系商人の商業地区であった。彼らの商業地区は、さらに旧ホワイト タウンの東部・北東部に拡大していった。

右に述べたように、イギリス人地区の二次的分散と拡大は、新ウィリアム要塞を核として、エスプラナードをとりかこむ形で展開した。すなわち、北から時計まわりに、エスプラナードの北辺にはヨーロッパ人商業地区と官公庁地区が、東辺の北半分にはチョウリンギー通りにそってイギリス人むけの高級商業・サービス業地区が、その南半分にはイギリス人高級住宅地が、そして南辺には、病院——のちにこの地区には、イギリス兵用とインド兵用の二つの陸軍病院が設置されていく——や公邸などが立地していった。この時期に成立したイギリス人地区の機能分化は、以後、独立時までカルカッ

タの基本的な都市構造として維持されていく。

一方、エスプラナードをとりかこむイギリス人地区の發展は、エスプラナードのもつ意味を変えていった。すでに述べたように、エスプラナードは、新要塞の軍事的必要から設けられた遮断空間であった。しかし、イギリス人地区の拡大と分化がすすむにつれて、エスプラナードは、各イギリス人地区を相互にむすび合わせる、巨大な広場空間あるいは公園と化していった。のちに、エスプラナードが、広場を意味するマイダン (Maidan、練兵場の意もあるが、広場の意味で用いられるのが一般) とよばれるにいたるのも、その機能変化を物語る。

(3) インド人地区の状況

イギリス人地区をのぞく残りの部分は、ブラック タウンとよばれ、インド人地区にあたっていた。第五図では、ブラック タウンは、実体以上に空白地区として示されているが、一七五六年当時にくらべると、インド人地区も北方および東方に大きく拡大した。ブラック タウンの中心は、上述したヨーロッパ人商業地区に接してフーグリ川ぞいに北へとひろがるブラ、バザール (Burra Bazar)、ラム、バザール (Ram Bazar)、およびバブー、バザール (Baboo Bazar) にあった。そこは、今日にいたるも、カルカッタの商業中心として継承されている。おそらく、この時期には、旧マラータ濠まで市街地の充填がすすみ、ブラック タウンも大きくひろがっていたものと思われる。旧マラータ濠も埋め立てられて、道路に転用されつつあることは、第五図にみるとおりである。一七九九年には、同濠は完全に埋め立てられて、環状道路 (Circular Road) と化する。

インド人地区は、せまい道路が錯綜し、衛生状態もきわめて悪く、貧弱な家屋のたちならぶ住環境の悪化地区であった。当時のブラック タウンの混乱した土地利用状況については、いくつかの記録が残っている。

たとえば、一八〇三年にカルカッタを訪れたヴァレンティア卿 (Lord Valentia) は、つぎのように述べている。^⑩ 「いままでは、カルカッタの町は、その規模からみても、またヨーロッパ人の居住地区をかざっている壮大な建築群からみても、イ

ンド政府の首都たるにふさわしい。チョウリンギーは、自分の知っている都市の中では、もっとも美しい景観をみせている。しかしブラック タウンは、完璧なまでにこれとは対照的である。その道路はせまく、きたない。しかもその二階建の家屋は、ほとんど泥壁とわらや竹ぶきで出来ており、たまにレンガ造りがあるのみである。それは、アイルランドの最貧階級の小屋とそっくりである」。彼は、イギリス人のつくりあげたカルカッタの都市景観を誇りつつ、ヨーロッパ人地区とインド人地区との対照性を強調する。インド都市のもつこの二重性は、以後インド都市論の基調となっていく。^⑫

時代は前後するが、一七八九年にベンガルを訪れたグランドパー(Grandpre)も、ダルフージ広場周辺のヨーロッパ人地区の景観が、世界の都市のなかでも有数のものだと誇りつつも、同広場からすこしはなれたティレッタ バザール (Tiretta Bazar)——ホワイト タウンの北東境に所在——付近について、つぎのように記している。^⑬

「道路は泥土のまま、家屋と道路との間に掘られた溝は、あらゆる汚物の捨て場である。路上や家で死んだ動物の死骸なども、そこに投げ込まれ、放置され、腐敗していく。困窮、病氣あるいは事故のため、多数のあわれな人間も路上で死んでいく。宿所の玄関の前に、あわれな人間の死体がころがり、二晩にわたって飢えた動物(ジャッカル)たちの餌食となっていくのをみた」。

同様の記録は、一七八〇年にカルカッタに滞在したマッキントッシュ(Mackintosh)にも、見い出される。^⑭ 彼は、「住宅・小屋・掘建小屋、大路・小路・路地・まがりくねった道、どぶ・汚水だめが、ごちゃ混ぜになって、人間の感覚や健康にとって不快な汚物と腐敗のかたまりをつくりあげつつ、インドにおけるイギリス東インド会社の首都を構成している。ごく一部の地区のみが清潔であるが、それは、夜間は飢えたジャッカルとの、また昼間は飢え切ったハゲタカやタカやカラスとの親しいつきあいのおかげである。おなじように、よどみ悪臭をはなつ水たまりが生みだす蚊の襲撃を、一時的にも防いでいるのは、公道や掘建小屋からふきあがる煙である」と述べている。

これらのブラック タウンに関するイギリス人の諸記録は、自らつくりあげたホワイト タウンを美化し、逆にブラッ

ク タウンの状況をあげつらうという一面をもつことは否定できない。たしかにブラック タウンの無秩序な拡大は、第五図の上でも、そこでの道路の錯綜状況によってあきらかである。しかし、その無秩序な都市拡大は、東インド会社の政策に責任の一端がもとめられる。それは、十八世紀初めから十九世紀にかけて、同会社は、カルカッタの都心部で地代収入をもたらずものは何であれ、積極的に賃貸する政策を採用したことである。^⑤そこから、いわゆる都市ザミンダリー制が発展し、土地・家屋の賃貸業が、商業やサービスマンとならぶ主要な投機対象となっていく。とくに、都市雑役者への低質な賃貸住宅の供給が、その主たる対象であった。カルカッタは、首都として成長していくにつれて、ますます消費的性質をつよめ、雑役的労働力への依存を大にしていた。くわえて、カースト制度の存在は、この傾向に一層の拍車をかけた。これらの結果、都市ザミンダリーによる、雑役労働者むけの不良住宅の建設が、盛行した。ここに、今日にもつづくバスティ (Bastee) とよばれる不良住宅地区形成の発端が求められる。^⑥その形成は、カルカッタがほとんど工業をもたなかった十八世紀において、すでにみとめられるのである。その意味では、バスティの形成は、工業化の所産とはいえないのである。

ブラック タウンの拡大は、右に述べたバスティの拡大をともないつつ展開した。ここでは、既述の引用が示すように、生活基盤や公衆衛生について、なんら配慮は払われていなかった。たとえば、一七七〇年のコレラ流行に際して、六月十日から九月十日までの約三カ月間に、カルカッタの路上から撤去された死体だけでも七六、〇〇〇にのぼったという報告がある。^⑦この数字は過大であるとしても、人口の増大につれて、公衆衛生も加速的に悪化していったのである。そのため、一七八一年には、カルカッタ改良計画が提案され、東インド会社は、微温的ながらもインド人地区をも含めた、カルカッタの都市整備に着手せざるを得なくなった。つづく十九世紀は、カルカッタにとって都市整備と工業化の世紀となるのである。これについては、稿をあらためることにしたい。

⑤ Muir, R.: *The Making of British India, 1756-1858*, Manchester,

1915, p. 58 には、講和条約の全文が掲げられている。それによると、

損害賠償金一、七七〇万ルピーの内訳は、東インデヤ会社が一〇〇〇万ルピー、カルカッタ在住のイギリス人に五〇〇万ルピー、おなじくインデヤ人に二〇〇万ルピー、おなじくフランス人に七〇万ルピーである。

- ② Bengal Presidency: *op. cit.*, p. 26.
- ③ Banerjee, B. and Roy, D.: Industrial Profile of Calcutta Metropolitan District, Calcutta, 1967, p. 25.
- ④ Forrest, G.W.: Cities of India, London, 1905, p. 276.
- ⑤ Ghosh, S.: *op. cit.*, p. 54.
- ⑥ quoted by India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 42.
- ⑦ *ibid.*, p. 6.
- ⑧ *ibid.*, p. 4.
- ⑨ Forrest, G. W.: *op. cit.*, p. 295.
- ⑩ India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 28.
- ⑪ quoted by *ibid.*, p. 8.
- ⑫ 大久保清三
Brush, J. E.: *op. cit.*
- Breze, G.: Urban Development Problems in India, 4. 4. 4. G, Vol. 53, 1963, pp. 254~265.
ditto: Urbanization in Newly Developing Countries, Englewood Cliffs, 1966, pp. 55~72.
- Karan, P.: The Pattern of Indian Towns, a study in urban morphology, *Jour. Amer. Inst. Planners*, Vol. 23, 1957, pp. 70~75.
- ⑬ quoted by India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 8.
- ⑭ quoted by *ibid.*, p. 8.
- ⑮ Ghose, B.: The Economic Character of Urban Middle-Class in 19th Century Bengal, (in Ganguli, B. N. ed.: *op. cit.*, pp. 137~138).
Blynn, G.: *op. cit.*, p. 126 ff.
- ⑯ Sinha, D.: Life in Calcutta Slum, (in Sinha, S. ed.: *op. cit.*, p. 87).
- ⑰ India Census Commissioner: *op. cit.*, p. 39.

(京都大学助教授

Establishment and Urbanization of Calcutta

by

Toshiaki Ohji

It was in 1690 that the English East India Company founded a factory at Sutanuty. Since then Calcutta has grown as an important city under British rule of Bengal and later the whole of India. In this article we will trace three stages in the process of the urbanization of Calcutta up to the end of the eighteenth century.

In the first period, the latter half of the seventeenth century, Calcutta, both politically and economically became a leading town in the Bhagirathi-Hooghly Rivers area, and at the same time the British began the colonization of Bengal. I also investigated why J. Charnock chose Sutanuty as the location for his factory in Bengal.

Second, we will follow the growth process of Calcutta in the first half of the eighteenth century. Especially the formation of the hinterland of Calcutta and the early city plans will be examined.

Through the third period, the latter half of the eighteenth century, we will look at the process of change in Calcutta. The British recapture of Calcutta from Siraj-ud-Ullah, and victory at the battle of Plassey greatly changed the character of the city. Since then, this factory town established by the British East India Company in Bengal grew into a politically and strategically important city, even after British Colonial rule ended. The transition was clearly marked in the plans to rebuild Calcutta after the battle. The basic urban structure of the city, which has remained up to now, was established during this period, and at the same time areal segregation of the residential area between the English and the Indian communities was definitely marked off.